

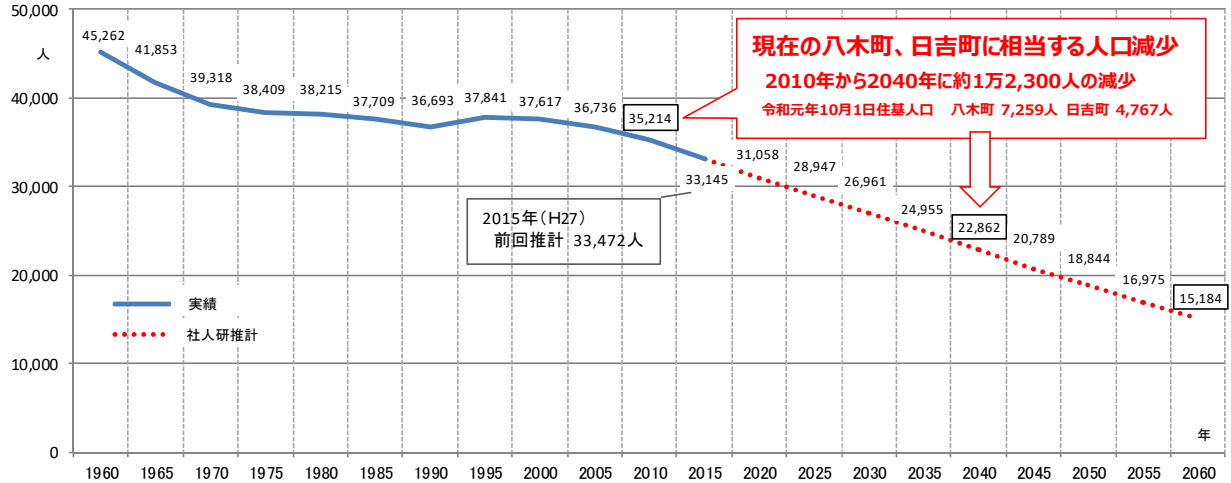
南丹市人口ビジョン

(改定)

令和2年3月

南丹市

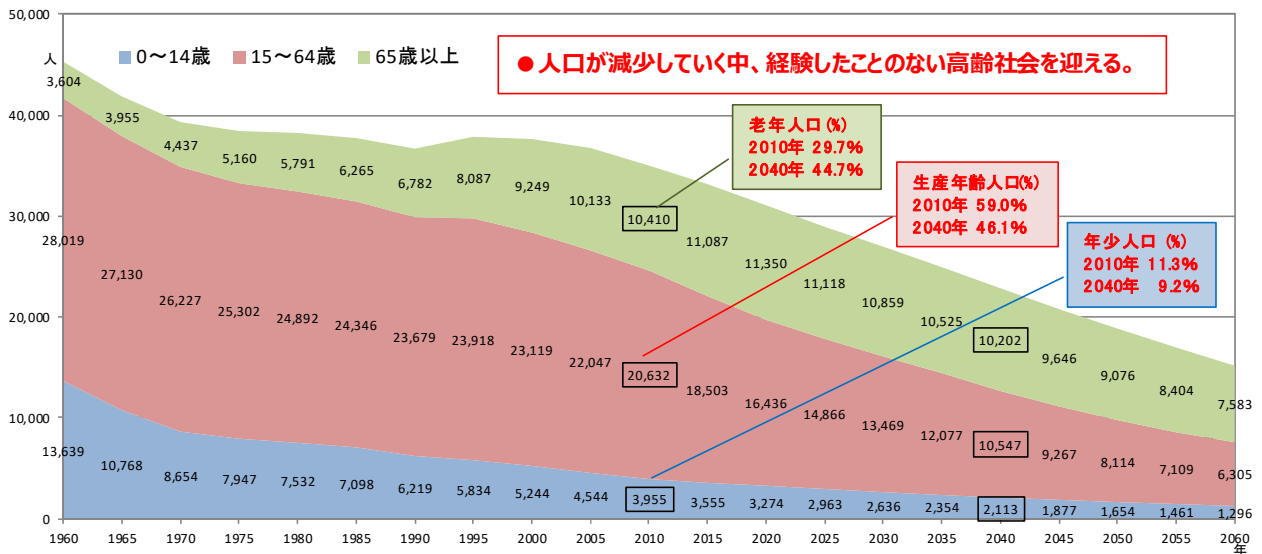
1. 南丹市の人口の推移



人口推計の前提

1. 人口ビジョンの対象は、国勢調査と同じで、南丹市に常駐する総人口とする。
2. 2015年10月1日を起点として、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計による2045年までの推計方法を準用し、2060年までの推計を行う。
3. 国勢調査（5年毎）を推計の参考とできない場合は、その傾向を大きく逸脱しないように調整を行う。

2. 南丹市の年齢3区分別人口の推移



3. 社会動態（転入先・転出先ランキング）（H30）

転入内訳（人）		
1位	京都市	267
2位	亀岡市	147
3位	大阪府	141
4位	兵庫県	76
5位	京丹波町	69
6位	滋賀県	49
7位	東京都	38
8位	舞鶴市	23
9位	綾部市	22
9位	福知山市	22
その他		358
計		1,212

転出内訳（人）		
1位	京都市	323
2位	大阪府	167
3位	亀岡市	136
4位	兵庫県	84
5位	東京都	54
6位	滋賀県	52
7位	京丹波町	36
8位	神奈川県	23
9位	長岡京市	20
9位	岡山市	20
その他		331
計		1,246

移動数（プラス）の内訳（人）		
1位	京丹波町	33
2位	福知山市	22
2位	綾部市	22
4位	三重県	15
4位	広島県	15
6位	和歌山県	14
7位	舞鶴市	12
8位	亀岡市	11
8位	京丹後市	11
10位	愛媛県	10

移動数（マイナス）の内訳（人）		
1位	京都市	▲56
2位	大阪府	▲26
3位	長岡京市	▲20
4位	神戸市	▲18
5位	東京都	▲16
5位	向日市	▲16
7位	埼玉県	▲12
7位	千葉県	▲12
7位	岐阜県	▲12
7位	奈良市	▲12

目 次

1. 人口ビジョンについて	1
(1) 南丹市人口ビジョンの位置づけ	1
(2) 対象期間	1
2. 人口の現状	1
(1) 人口推移	1
① 総人口	1
② 年齢別人口	1
③ 人口構成比	2
(2) 人口動態	2
① 自然動態	2
② 社会動態	4
(3) 労働状況等	5
① 通勤・通学の状況	5
② 産業別就業者の状況	6
③ 観光の状況	8
3. 将来人口の見通し	10
(1) 南丹市のすう勢人口の見通し	11
(2) 将来人口シミュレーション	11
(3) 人口の将来展望	13
① 南丹市における人口動向・構造の課題	13
② 将来を見据えた人口問題に対する取り組みの考え方	13
(4) 目指すべき将来の目標人口と展望	14
① 目標人口	14
② 目標人口に基づく将来展望	15

1. 人口ビジョンについて

(1) 南丹市人口ビジョンの位置づけ

南丹市人口ビジョンは、人口減少に伴う地域課題に対応するために、国の「長期ビジョン」を勘案しつつ、人口の現状を分析し、今後目指すべき将来の方向と人口の将来の展望を提示するものです。また、同時に策定する「第2期南丹市地域創生戦略」の目標設定や、必要な施策・事業を検討する上で、重要な基礎資料となります。

(2) 対象期間

南丹市人口ビジョンの対象期間は、国の「長期ビジョン」と同じく、2010年から2060年までとします。

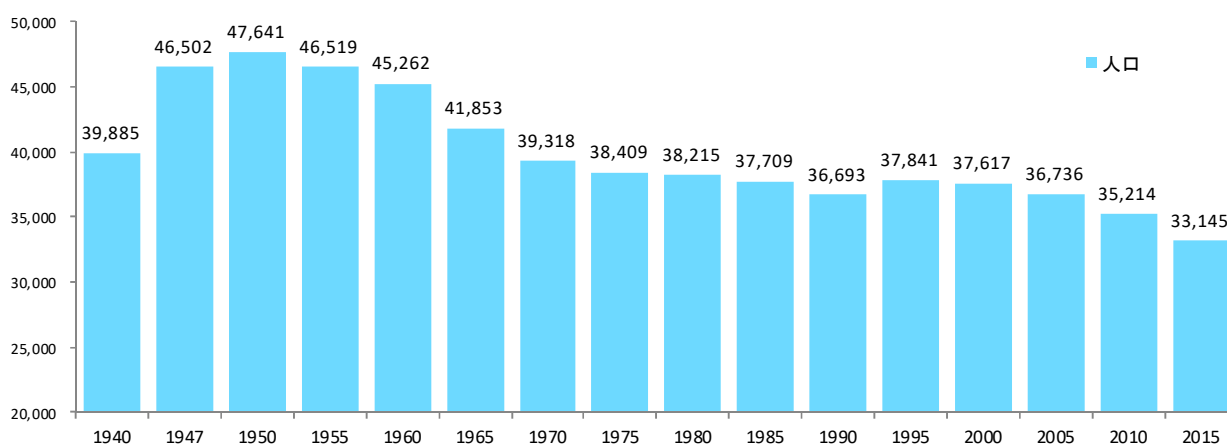
2. 人口の現状

(1) 人口推移

① 総人口

南丹市では、1950年（昭和25年）の、総人口4万7,641人をピークに人口減少に入り、1995年（平成7年）に一時的に増加しましたが、その後、減少を続け、2015（平成27年）の総人口は、ピーク時から約1万5千人減少しています。

◆ 総人口の推移

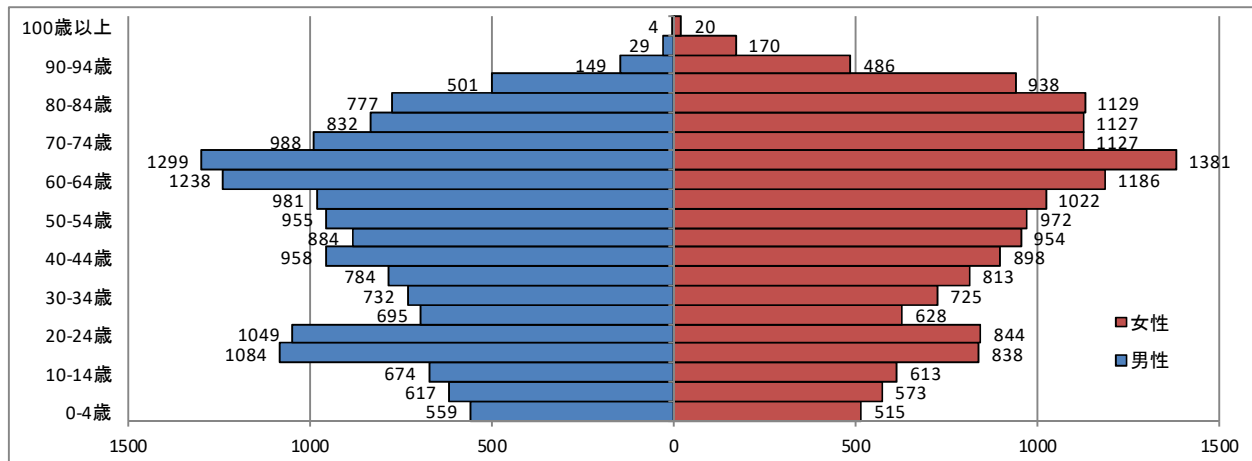


② 年齢別人口

2015年の南丹市の5歳階級別の人口構造をみると、団塊の世代を含む65歳以上の人口だけでなく60～64歳の人口の割合も大きくなっており、今後さらに高齢化が進むことが予測されます。

一方で、大学や高校があることから、15～24歳の若い世代の人口も多く、今後も一定数が確保できることが予測されます。

◆性別の5歳年齢別人口（2015年）

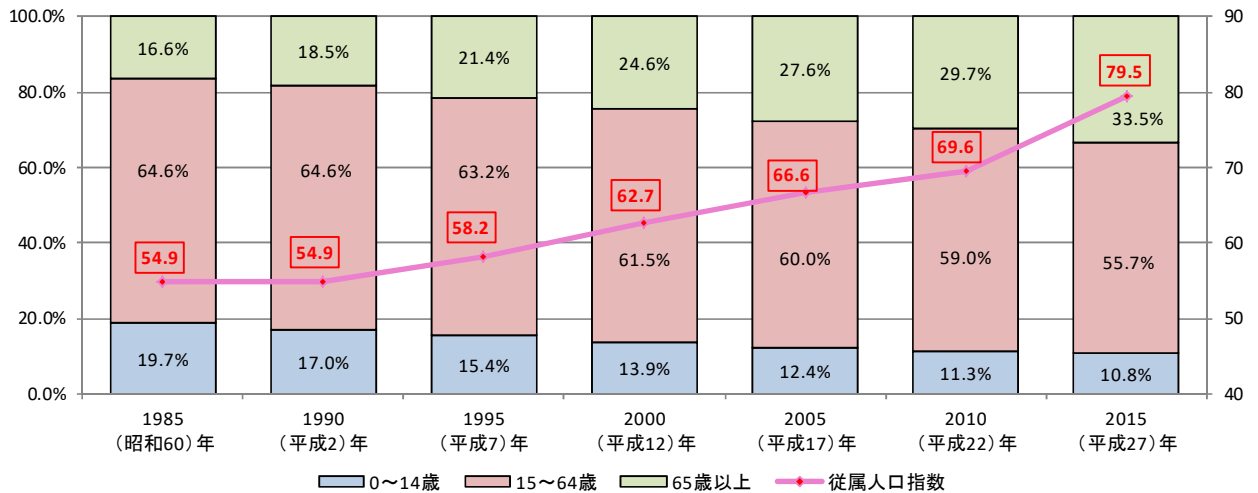


③人口構成比

年齢3区分別の人口構造の推移についてみると、老年人口では、1985年から2015年までの30年間で16.9ポイントの増、年少人口では、30年間で8.9ポイント減となっており、少子高齢化がさらに進行している状況です。

また、働き手である生産年齢人口100人が、年少人口と老年人口を何人支えているかを示す「従属人口指数」では、1985年54.9から2015年には79.5まで増となっています。

◆年齢3区分別人口構成と従属人口指数

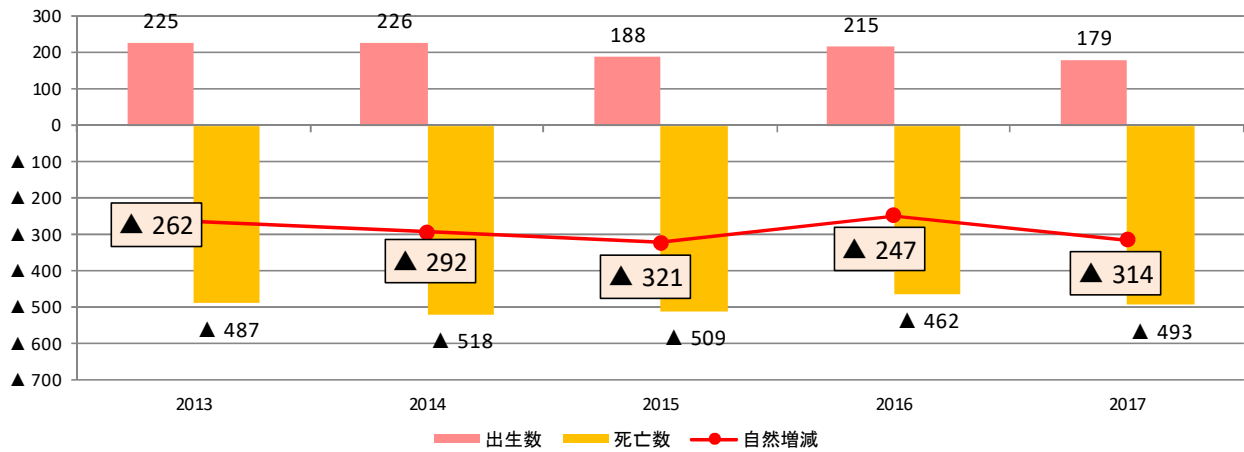


(2) 人口動態

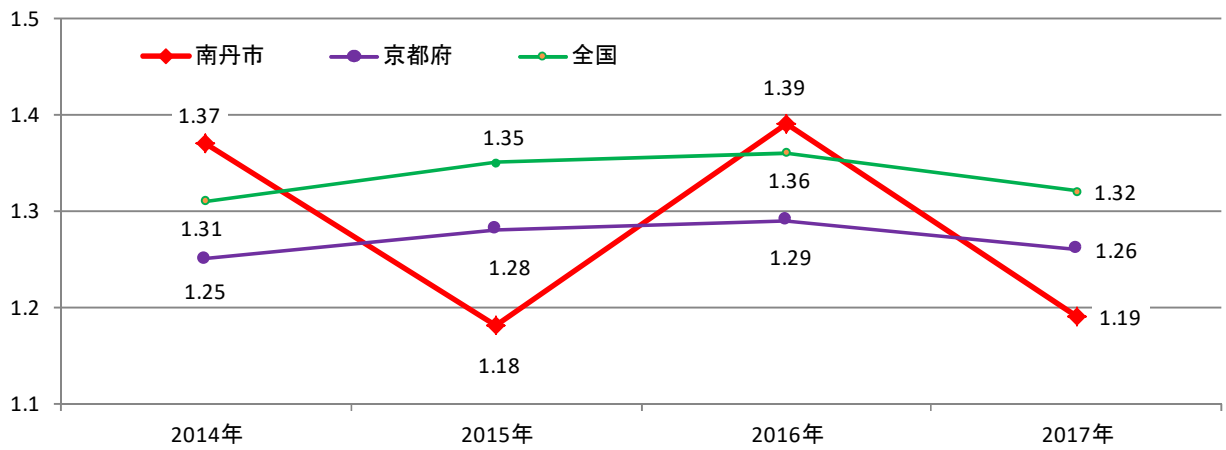
① 自然動態

2013~2017年の5年間の出生・死亡者数をみると、出生数は横ばいですが、死亡者数は増加しており、すべての年で自然動態は、マイナスとなっています。2014~2017年の4年間の合計特殊出生率の推移をみると、南丹市は京都府全体の推移より増減が大きく、最新の数値では京都府や全国の平均を下回っています。

◆自然増減の推移

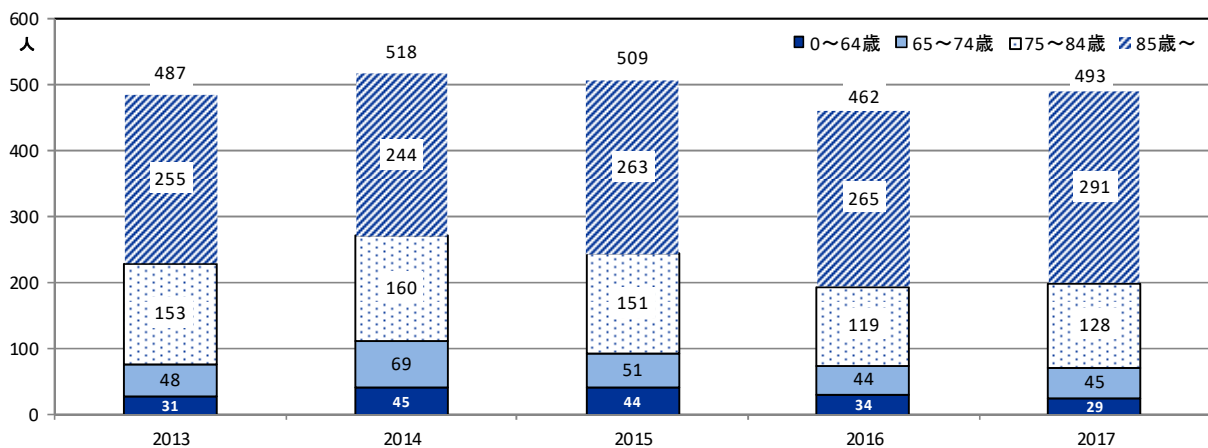


◆合計特殊出生率 ※厚労省の発表が遅れているため、2018 データ含まず



※注 合計特殊出生率は、各年度の人口動態統計による母親の年齢5歳階級別出生数を、各年の住民基本台帳（全国及び京都府は1月1日付、南丹市は3月31日付）による15～49歳の5歳階級別の女性人口で除した値を5倍した値の合計

◆死亡の状況



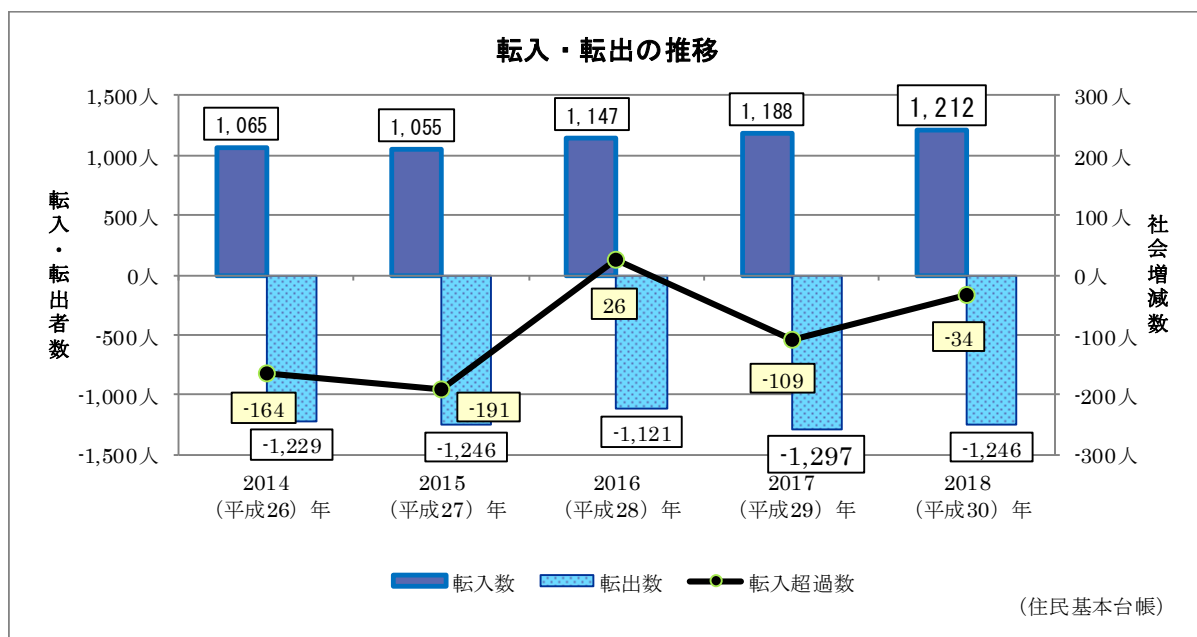
② 社会動態

2014～2018年の5年間の転入・転出者数をみると、転入は概ね増加傾向で推移しています。一方で、転出は概ね横ばいで推移しており、2016年を除き、転出超過の状況が続いています。

2018年の転入・転出の状況を性別・年齢3区分別にみると、男性・女性ともに生産年齢人口では転出が転入を上回っています。

また、2018年の転入・転出の差である純移動数について、性別・年齢区分別にみると、20～24歳で男性が60人の転入超過なのに対し、女性は32人の転出超過となっています。なお、20～30代の移動が多いのは、進学・就職・結婚等の移動を伴うライフイベントが主要因であると考えられます。

◆転入・転出の推移

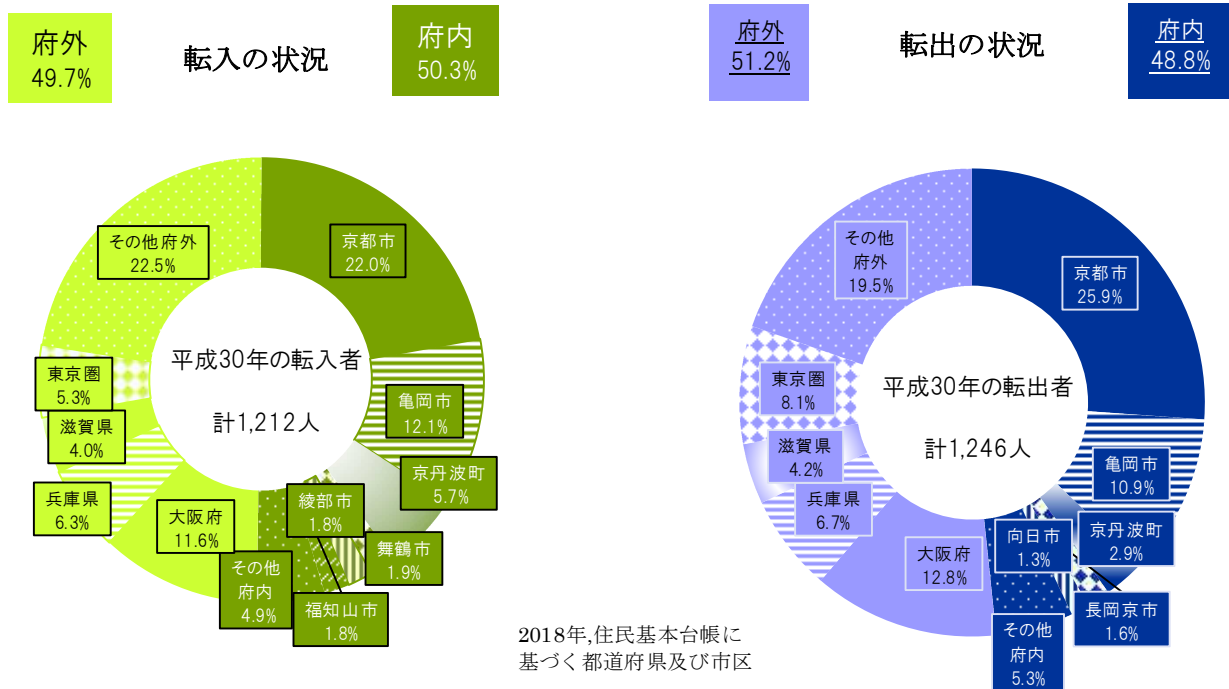


◆性別・年齢5歳階級別の転入・転出の状況

(人)	純移動		転入		転出		
	男(純移動)	女(純移動)	男(転入)	女(転入)	男(転出)	女(転出)	
年少人口	0～4歳	2	▲1	34	33	▲32	▲34
	5～9歳	14	7	23	17	▲9	▲10
	10～14歳	0	▲8	9	5	▲9	▲13
	計	16	▲2	66	55	▲50	▲57
生産年齢人口	15～19歳	24	24	58	48	▲34	▲24
	20～24歳	▲64	▲42	178	124	▲242	▲166
	25～29歳	▲32	▲39	84	69	▲116	▲108
	30～34歳	▲5	22	66	69	▲71	▲47
	35～39歳	2	9	52	32	▲50	▲23
	40～44歳	0	1	31	26	▲31	▲25
	45～49歳	▲10	▲5	21	19	▲31	▲24
	50～54歳	7	6	22	17	▲15	▲11
	55～59歳	9	7	21	15	▲12	▲8
	60～64歳	3	7	15	14	▲12	▲7
計	▲66	▲10	548	433	▲614	▲443	
老年人口	65～69歳	6	9	17	16	▲11	▲7
	70～74歳	5	3	9	12	▲4	▲9
	75歳～	5	0	22	34	▲17	▲34
	計	16	12	48	62	▲32	▲50
合計	▲34	0	662	550	▲696	▲550	

(2018年人口移動報告)

2018年の転入・転出の状況を居住地別にみると、府内では転入・転出ともに京都市・亀岡市の比率が高く、合計34～37%程度となっています。府外では、東京圏への転入・転出は少なく、関西での移動が多くなっています。



(3) 労働状況等

① 通勤・通学の状況

2015年の市内常住で15歳以上の就業者・通学者18,389人の従業通学地についてみると、市内に通勤・通学が11,398人(62.0%)、他市町村が6,441人(35.0%)となっています。

男女別・従業通学地別のしない常住15歳以上就業者・通学者数

(人)

区分	市内		他市町村			従業・通学市区町村「不詳・外国」	従業地・通学地「不詳」	計
	自宅で従業	自宅外の自市で従業・通学	府内の他市町村で従業・通学	大阪府で従業・通学	その他の県で従業・通学			
男	1604	4312	3521	208	224	70	304	10243
女	1186	4296	2220	92	71	35	246	8146
小計	2790	8608	5741	300	295	105		
計 (構成比)		11398 (62.0%)				6441 (35.0%)	550 (3.0%)	18389 (100%)

(2015年,国勢調査)

南丹市から他市町村への通勤・通学者は、府内では京都市が2,489人と最も多く、次いで亀岡市が2,005人、京丹波町が767人となっています。また、府外では大阪府が300人と最も多くなっています。

南丹市に通勤・通学している他市町村常住の就業者・通学者7,733人については、亀岡市が3,400人と最も多く、次いで京都市が1,706人となっています。

常住地および従業通学地別の15歳以上就業者・通学者数 (人)

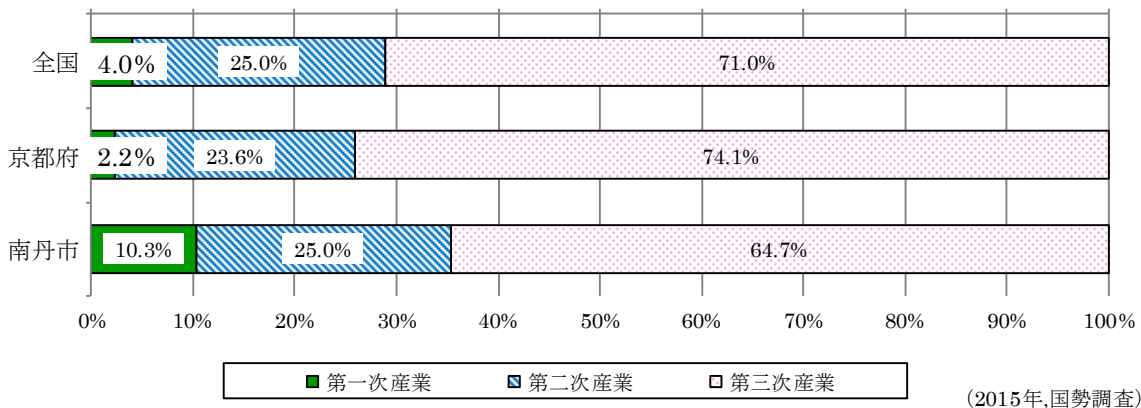
区分	南丹市から他市町村へ			他市町村から南丹市へ			
	総数	就業者	通学者	総数	就業者	通学者	
総数	6441	5510	931	7733	6087	1646	
府内	京都市	2489	1969	520	1706	364	
	亀岡市	2005	1841	164	3400	383	
	京丹波町	767	751	16	962	128	
	福知山市	130	121	9	84	26	
	綾部市	110	109	1	66	21	
	長岡京市	66	57	9	104	25	
	宇治市	41	26	15	85	37	
	その他	133	108	25	238	92	
	計	5741	4982	759	6645	5569	1076
府外	大阪府	300	216	84	406	200	
	大阪市	143	116	27	62	38	
	吹田市	27	15	12	25	13	
	高槻市	15	13	2	62	23	
	その他	115	72	43	257	126	
	滋賀県	98	55	43	245	149	
	兵庫県	127	116	11	248	91	
	その他	70	49	21	189	130	
	計	595	436	159	1088	518	570
	不詳	105	70	35	655	595	60

(2015年,国勢調査)

② 産業別就業者の状況

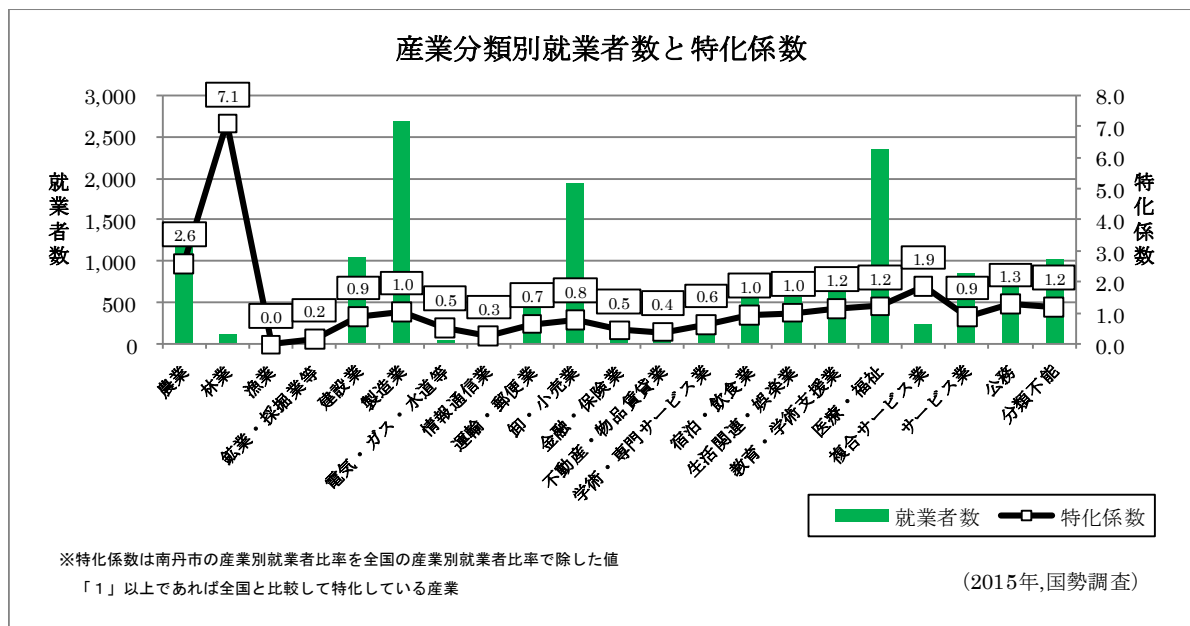
2015年の産業別の就業者構成比を、全国・京都府・南丹市で比較すると、第1次産業が全国と京都府を大きく上回っており、その分第3次産業が下回っています。

産業別就業者構成比

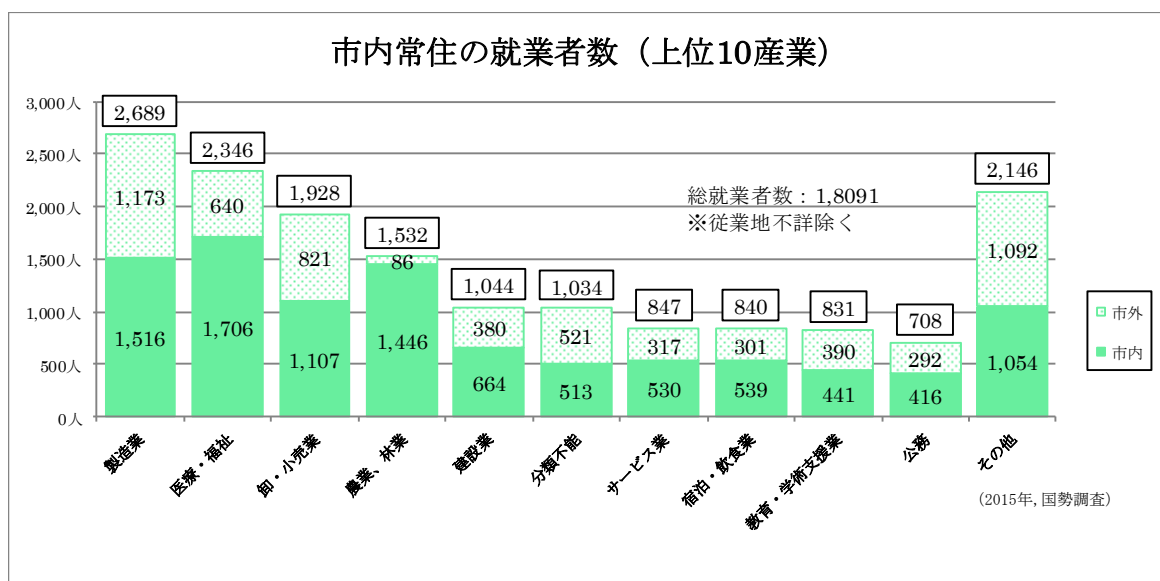


2015年の就業者数について産業分類別にみると、製造業が最も多く、次いで医療・福祉、卸・小売業となっています。

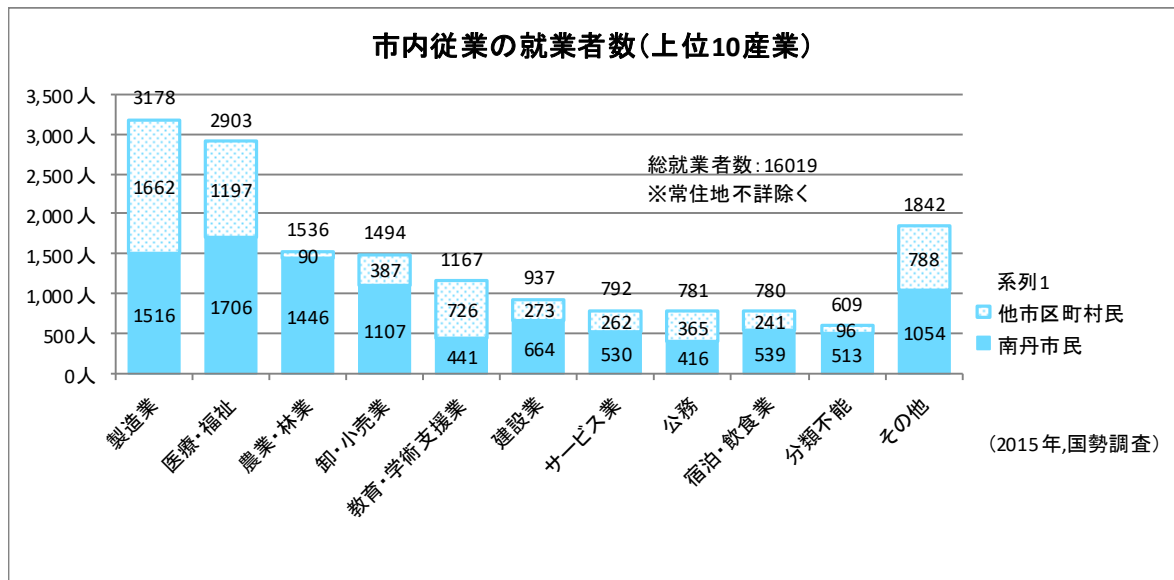
特化係数については林業が7.1と非常に高く、農業のほか、郵便局・農業協同組合などを含む複合サービス業も比較的高くなっています。その他の特化係数1を超える産業は教育・学術支援業、医療・福祉、公務となっています。



2015年の南丹市常住の就業者について産業分類別にみると、製造業が2,689人と最も多く、そのうち1,516人(56.4%)が市内で就業しています。次いで、医療、福祉が2,346人で、そのうち1,706人(72.7%)が市内で就業している状況です。

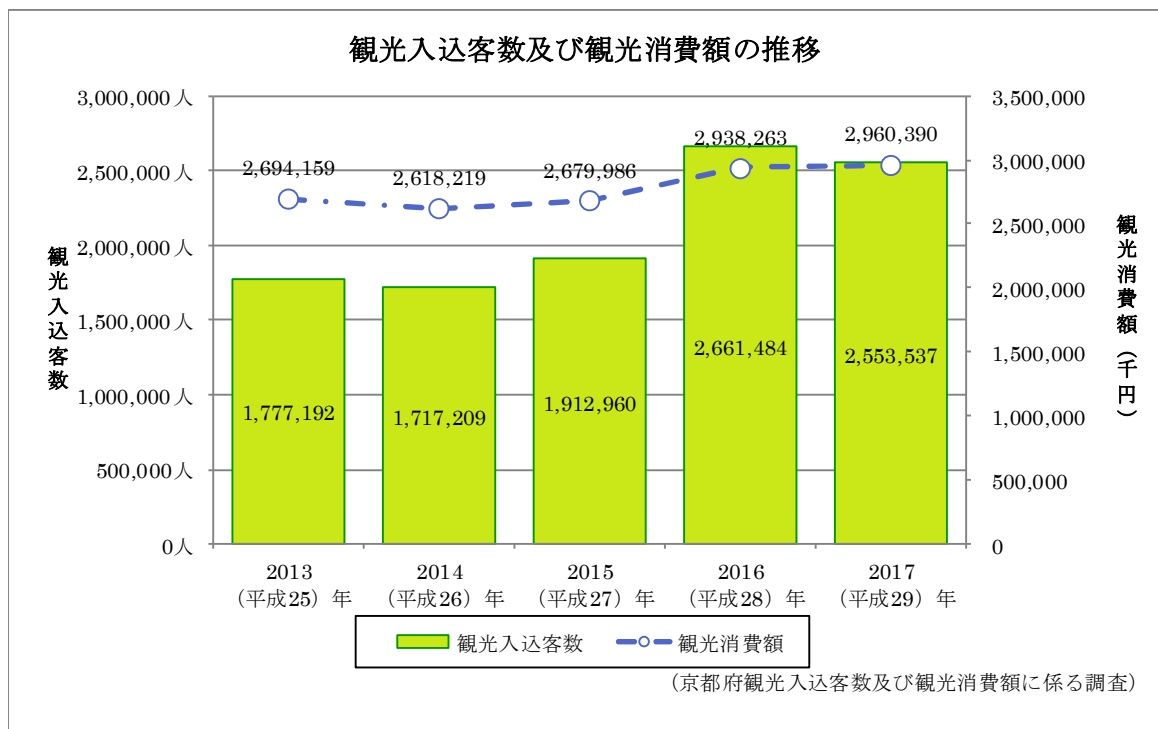


また、2015年の南丹市内従業の就業者数について産業分類別にみると、市内常住の就業者数と同じく、製造業が3,178人と最も多く、そのうち1,662人(52.3%)が他市町村常住の就業者となっています。次いで、医療、福祉が2,903人で、そのうち他市町村常住の就業者は1,197人(41.2%)となっています。



③ 観光の状況

2013～2017年の5年間の南丹市の観光入込客数と観光消費額の推移をみると、観光入込客数は横ばいですが、観光消費額は2014年以降、増加傾向で推移しています。



2017年の府内の市町村の観光入込客数と観光消費額を比較すると、府内25市町村の中で南丹市は観光入込客数が7番目、観光消費額は8番目に多くなっています。

◆府内の観光入込客数及び観光消費額

	観光入込客数(人)	府内シェア	観光消費額(千円)	府内シェア
京都府	86,867,078		1,188,423,278	
京都市	53,623,000	61.7%	1,126,787,000	94.8%
宇治市	5,509,815	6.3%	13,142,852	1.1%
宮津市	3,005,400	3.5%	9,713,737	0.8%
亀岡市	2,909,122	3.3%	7,469,340	0.6%
京丹波町	2,736,460	3.2%	3,062,401	0.3%
八幡市	2,601,890	3.0%	638,431	0.1%
南丹市	2,553,537	2.9%	2,960,390	0.2%
舞鶴市	2,548,679	2.9%	4,521,978	0.4%
京丹後市	2,184,798	2.5%	6,442,855	0.5%
長岡京市	1,261,982	1.5%	549,311	0.0%
木津川市	1,005,158	1.2%	2,281,425	0.2%
城陽市	950,855	1.1%	1,885,448	0.2%
福知山市	946,618	1.1%	1,936,377	0.2%
南山城村	868,155	1.0%	1,835,487	0.2%
綾部市	663,160	0.8%	713,973	0.1%
精華町	643,162	0.7%	196,658	0.0%
大山崎町	499,864	0.6%	118,889	0.0%
向日市	472,823	0.5%	140,914	0.0%
与謝野町	459,048	0.5%	583,019	0.0%
井手町	326,082	0.4%	111,421	0.0%
伊根町	301,436	0.3%	1,124,285	0.1%
笠置町	222,558	0.3%	648,435	0.1%
京田辺市	212,264	0.2%	651,119	0.1%
和束町	152,984	0.2%	783,169	0.1%
宇治田原町	150,558	0.2%	119,343	0.0%
久御山町	57,670	0.1%	5,021	0.0%

(2017年,京都府観光入込客数及び観光消費額等に係る調査)

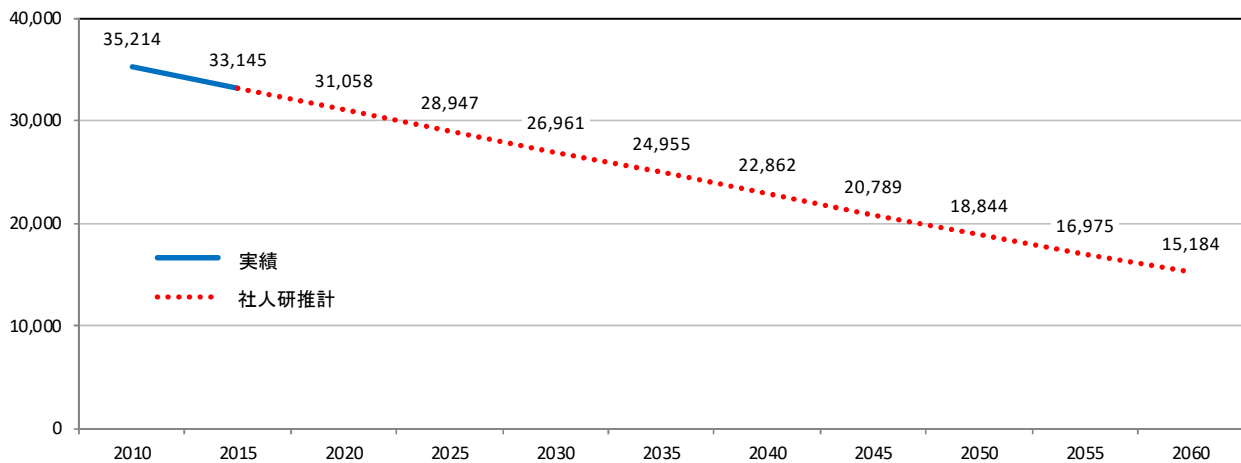
3. 将来人口の見通し

(1) 南丹市のすう勢人口の見通し

戦略的な人口政策の取り組みを想定せず、推測される将来の人口を「すう勢人口」と言います。南丹市は、前回同様に、すう勢人口の見通しは、国立社会保障・人口問題研究所による推計に準拠し、次のような仮定に基づいて推計します。

3要素	将来設定の基本的な考え方
出生	原則として、2015年の全国の子ども女性比（15～49歳女性人口に対する0～4歳人口の比）と各市町村の子ども女性比との比をとり、その比が2015年以降2045年まで一定として市町村ごとに仮定。
死亡	原則として、55～59歳→60～64歳以下では、全国と都道府県の2010年→2015年の生残率の比から算出される生残率を都道府県内市町村に対して一律に適用。60～64歳→65～69歳以上では、これに加えて、都道府県と市町村の2000年→2005年の生残率の比から算出される生残率を市町村別に適用。
移動	原則として、2010～2015年の国勢調査（実績）に基づいて算出された純移動率が、2020～2025年までに定率で0.5倍に縮小し、その後はその値を一定と仮定。

◆すう勢人口



【推計の結果】

- 南丹市のすう勢人口は、今後も一貫した減少傾向で推移する見込み。
- 2015年（平成27年）国勢調査の結果の公表を踏まえた推計と現状と大きな剥離はない。
- 2020年には、31,058人にまで緩やかに減少する見込み。
（2019年10月1日住基人口 31,670人で、推計と大きな剥離はない。）
- 2060年には、15,184人にまで減少する見込み。

(2) 将来人口シミュレーション

すう勢人口の見通しを踏まえ、2015年以降を対象に、出生動向と移動動向を次のような仮定し、2つのケースの将来人口のシミュレーションを行います。

- ★ ケース1 すう勢人口+出生率上昇
- ★ ケース2 すう勢人口+出生率上昇+転入増（純移動が、ゼロ以上で）
 <国の長期計画の設定と同じ設定>

区分	ケース1	ケース2
出生	2015年以降について、合計特殊出生率が2020年に1.6、2030年までに1.8、2040年に人口置換水準(2.07)まで上昇、その後は2.07を維持するものと仮定。	2015年以降について、合計特殊出生率が2020年に1.6、2030年までに1.8、2040年に人口置換水準(2.07)まで上昇、その後は2.07を維持するものと仮定。
死亡	すう勢（社人研推計準拠）と同様。	すう勢（社人研推計準拠）と同様。
移動	すう勢（社人研推計準拠）と同様	2020年に移動（純移動率）がゼロ（均衡）、以降は、転入増が続くと仮定。

【出生の見通し】

すう勢人口では、2020年以降の合計特殊出生率が1.40程度で推移することが想定されていますが、若い年齢層の減少に伴い、出生数は減少の一途を辿ることが見込まれます。これに対し、ケース1、ケース2では、出生数が比較的安定的に推移することが見込まれます。

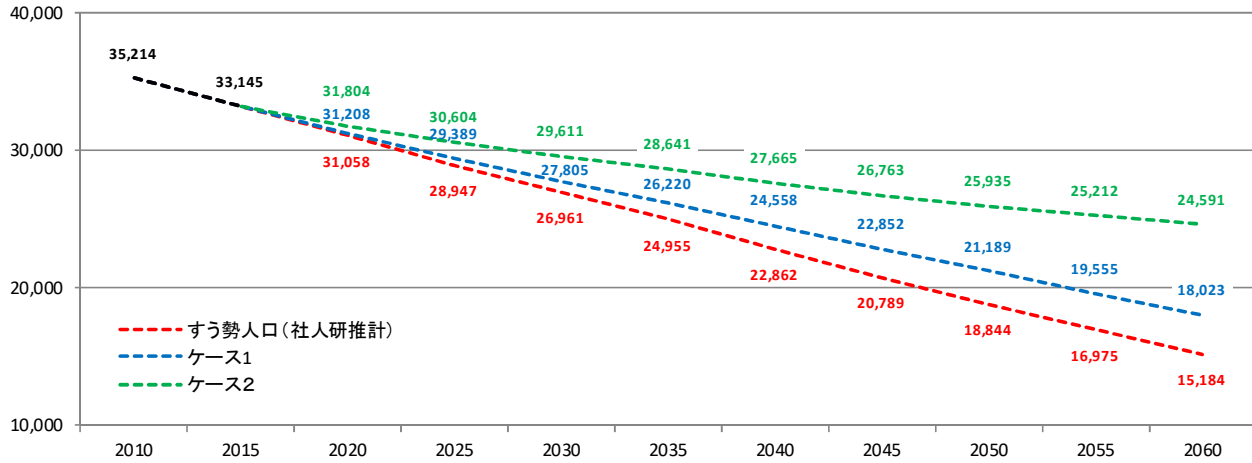
【死亡数の見通し】

死亡数については、すう勢人口や各シミュレーションにおいて、いずれも社人研推計準拠の設定を採用しています。したがって、すう勢人口や各シミュレーションにおける死亡数の差異は、出生数や移動数の違いに基づくものです。

【移動数の見通し】

すう勢とケース1では全国的な総移動数の縮小傾向を背景に、移動数が縮小していく推計となっています。ケース2では、2020年に移動（純移動率）がゼロ（均衡）となり、その後も転入増となるよう、移動率をなだらかに増加させており、2025年には転入超過に転じることを想定しています。

◆将来人口シミュレーションの結果



区分	推計結果の概要
すう勢人口	2020年以降、5年間で2千人程度、1年間に400人程度、少しずつ減少する。 自然動態は、出生数が減少し続けるため、大きなマイナスを止められない。 社会動態は、純移動が緩やかにマイナスを継続していく。
ケース1	2020年以降、5年間で1千人程度、1年間に200人程度、緩やかに減少する。 自然動態は、出生率を上げるが、少しずつマイナスとなっていく。 社会動態は、純移動が緩やかにマイナスを継続していく。
ケース2	2020年以降、5年間で2百人程度、1年間に40人程度、ほぼ横ばいで推移する。 自然動態は、出生率を上げるが、少しずつマイナスとなっていく。 社会動態は、純移動が2025年以降ゼロで緩やかに転入超過を継続していく。

◆年齢構造別人口の見通し

(人)	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
すう勢人口	33,145	31,058	28,947	26,961	24,955	22,862	20,789	18,844	16,975	15,184
0～14歳	3,555	3,274	2,961	2,634	2,352	2,113	1,876	1,654	1,461	1,296
15～39歳	8,333	7,121	6,098	5,373	4,801	4,222	3,810	3,434	3,052	2,705
40～64歳	10,170	9,314	8,770	8,097	7,277	6,323	5,456	4,679	4,057	3,600
65～74歳	4,856	5,024	4,286	3,837	3,709	3,662	3,437	3,030	2,690	2,263
75歳以上	6,231	6,325	6,831	7,020	6,816	6,541	6,210	6,047	5,714	5,320
ケース1	33,145	31,208	29,389	27,805	26,220	24,558	22,852	21,189	19,555	18,023
0～14歳	3,555	3,424	3,404	3,478	3,425	3,276	3,034	2,833	2,662	2,520
15～39歳	7,466	6,684	5,997	6,096	6,272	6,559	6,682	6,642	6,483	6,363
40～64歳	8,158	8,222	8,288	7,958	7,673	7,396	6,625	5,950	6,051	6,226
65～74歳	3,979	3,765	3,667	3,407	3,003	2,739	3,207	3,800	3,153	2,410
75歳以上	9,296	8,900	8,434	7,528	6,972	6,559	6,110	5,625	5,735	6,063
ケース2	33,145	31,804	30,604	29,611	28,641	27,665	26,763	25,935	25,212	24,591
0～14歳	3,555	3,437	3,519	3,835	4,028	4,116	4,023	3,889	3,759	3,709
15～39歳	8,333	8,000	7,712	7,435	6,659	5,977	6,078	6,253	6,540	6,661
40～64歳	10,170	9,219	8,605	7,974	8,051	8,134	7,812	7,525	7,239	6,486
65～74歳	4,856	4,943	4,175	3,658	3,475	3,397	3,158	2,792	2,545	2,986
75歳以上	6,231	6,205	6,594	6,708	6,428	6,040	5,692	5,476	5,130	4,748

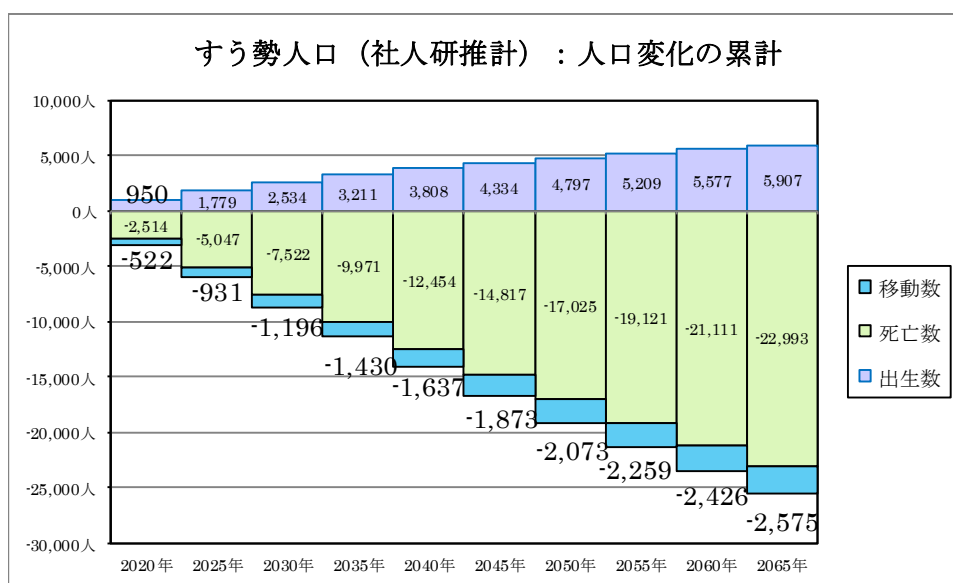
(3) 人口の将来展望

① 南丹市における人口動向・構造の課題

すう勢人口は、2015年の33,145人から2060年には15,100人程度へと減少することが見込まれますが、その減少の多くは死亡によるものです。

下図に示すとおり、2015年から2065年までの50年間で計22,993人程度の死亡が見込まれています。

高齢化した人口構造を背景に、死亡数を大きく減少させることは困難と考えられるため、今後の人口政策としては、出生数の増加及び転入促進・転出抑制が重要になってきます。



② 将来を見据えた人口問題に対する取り組みの考え方

2010年の総人口35,214人から、今後のすう勢人口として2060年には15,100人程度にまで減少することが見込まれます。

本市では、こうしたすう勢人口を踏まえた上で、合計特殊出生率の上昇、住みやすい地域づくりや転入の増加などによる定住促進を図ることにより、長期的視点から人口減少の抑制に取り組み、その目標として目指すべき将来の目標人口を設定します。

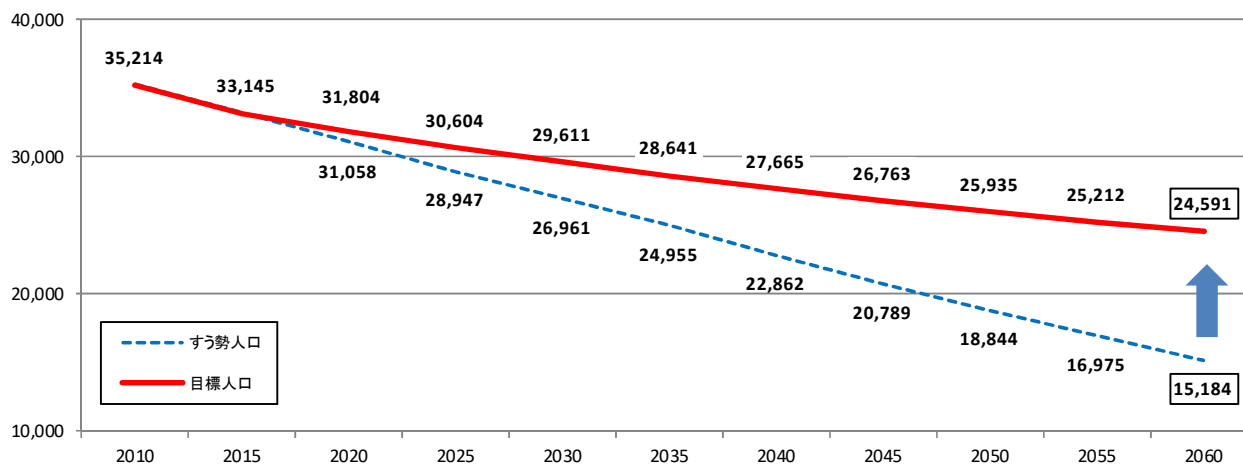
南丹市の将来の姿をとともに見据えつつ、地域の豊かな資源と安心・快適な暮らしを次の世代へと受け継いでいくために、目標人口を達成するための地方創生の取り組みを「総合戦略」として明らかにし、その着実な遂行を図っていくこととします。

(4) 目指すべき将来の目標人口と展望

① 目標人口

少子高齢化、転出超過といった本市の人口問題に対して、長期的視点から取り組むことにより、2060年において、24,500人程度の人口規模を目指します。

なお、目標人口における合計特殊出生率及び社会移動については、次のように仮定しています。(前述のケース2)。



【合計特殊出生率】

2015年以降について、合計特殊出生率が2020年に1.6、2030年までに1.8、2040年に人口置換水準(2.07)まで上昇、その後は2.07を維持するものと仮定。

2020年に移動(純移動率)がゼロ(均衡)、以降は、転入増が続くと仮定。

【社会動態】

2020年に移動(純移動率)がゼロ(均衡)となり、その後移動率がなだらかに増加し、2025年には転入超過に転じることを仮定します。

② 目標人口に基づく将来展望

【年少人口】

0～14歳の年少人口比率は、2015年の11%から、転入増や出生率の上昇に伴いその後増加し、2060年には15%程度になり、その後は人数・比率ともに安定していくことが想定されます。

様々な子育て支援策は、目標人口達成の前提となる合計特殊出生率の上昇を実現するための手段のひとつであるとともに、その結果として出現する未就学の子ども数に応じた対応施策でもあります。

年少人口は、今後も現状程度の水準を維持することから、子育て支援へのニーズが大きく縮小することは想定しづらく、今後も少子化対策の観点からの取り組みが重要になってきます。

【生産年齢人口】

消費面、生産面からその多くを担うことが期待される生産年齢人口については、人口規模の縮小に伴い、長期的にも縮小傾向で推移する見通しです。

人口構造の観点からは、2015年の56%から2060年には53%程度にまで減少するものと想定されます。

今後は、地域における雇用の創出を図るとともに、経済規模の縮小を抑制するためにも生産性の向上や、労働力人口の減少を和らげるために、女性や高齢者の活躍について力を入れていくことが重要です。

【高齢者人口】

高齢者人口は、2020年をピークに減少傾向になることが想定されますが、人口構造における高齢化率については、2015年の33%から上昇傾向で推移しますが、同程度を維持していくものと想定されます。

既にアクティブシニア世代とも呼ばれる団塊の世代は高齢者に含まれており、こうした比較的元気な高齢者に一人でも多く活躍していただくことが、人口減少期における市の活性化には不可欠と考えられます。